

## 日本藻類学会第 38 回大会開催記・参加記

### 大会を振り返って

宮地和幸

日本藻類学会第 38 回大会は 2014 年 3 月 14 日～18 日までの 5 日間、東邦大学習志野キャンパス理学部で開催されました。東邦大学での開催は 1996 年第 20 回大会以来で、その時に庶務幹事兼会計幹事をした宮地が 2014 年 3 月で東邦大学の定年を迎えるということで、2013 年山梨大学での大会で第 38 回大会開催を引き受けました。会場となる東邦大学では藻類学会の会員は 2 名のみで、かつ学会に積極的に参加しているのは宮地だけと、果たして大会がつつがなく終了できるのか不安でした。しかし、学外におられる千葉県中央博物館の宮田、菊地両氏の協力が得られることもあって、気張った企画さえしなければ何とかなるとふんで、ひきうけました。3 人で集まり、大会会長は学会を開催する当事者である宮地和幸に決まり、会場は東邦大学習志野キャンパスにすることなど大まかに役割分担を決め準備をすることになりました。役割分担は全般を宮地（東邦大）が、公開講演会を宮田が、そしてエクスカージョンを菊地が担当しました。それ以外の企画は話し合いの結果、実働人数も少ないことから、最低限の企画だけに止めることにして、ワークショップはこれまでも何かとコーディネートをしていた国立環境研の河地氏をお願いをし、今回の大会企画として、大会会長の宮地がこれまで専門にしてきた緑藻を中心にシンポジウムが出来ないか、お茶の水女子大の鳥田智氏に相談し、緑藻でシンポジウムのコーディネートをすることになりました。

実際に準備を始めたのが 9 月を過ぎており、最初の作業は大会の為のゆうちょ銀行の口座を作ることからでした。大会開催の準備を始めるのが遅かったこともあり、学外からの援助は望めませんでした。唯東邦大学内で学会を開くと、理

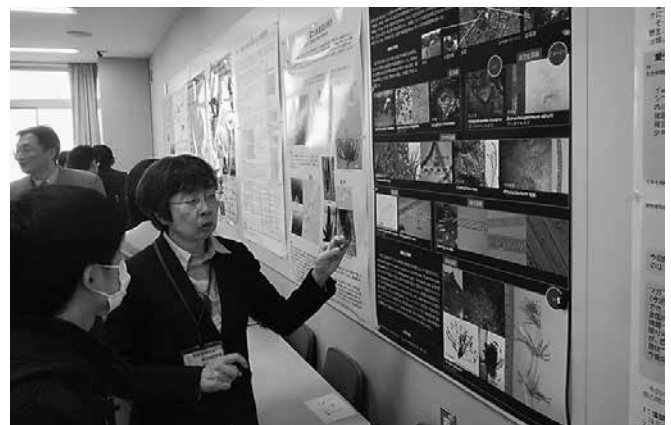
学部同窓会から補助金を出して貰えることもあり、大会運営はその東邦大学理学部同窓会鶴風会の補助金を含めて、学会本部からの援助金、さらに大会参加者の参加費で賄うことになりました。東邦大学では学会等の開催に会場の使用経費を払わなくて良いこともあり、赤字を出さずに大会を終えることができました。更に、公開講演会は東邦大学理学部との共催となり、講師料、ポスター印刷や電車へのつり広告など全部東邦大学で経費を持って戴きました。これは、大会運営にとって非常に助かりました。

本大会では、3 月 14 日のプレ集会日本女子大の土金勇樹氏と神戸大の早川昌志氏を世話人に「アルガムムービー鑑賞会」を皮切りに 15,16 日に 136 題（口頭発表 58 題、ポスター発表 81 題）の研究発表がありました。最終的には例年とそれほど変わらない 255 名の方が参加されました。大会会場の東邦大学理学部 III 号館 2 階と 3 階、V 号館は 1 階と 2 階、薬学部 C 館 1 階と若干分散した会場設営となりましたが、それぞれの講義室の特性に合わせての会場設営だったと自負しており、それほど不便をかけずに済んだのではないかなと思っています。

15 日は、口頭発表、ポスター発表、企画シンポジウムが行なわれました。口頭発表は例年通り 2 会場でおこないました。発表開始の時間については、千葉県船橋市の開催で、多くの参加者が最寄り駅の津田沼周辺での宿泊ではなく、東京都区内からこられることも考えて、発表開始の時間については 15,16 日の 2 日間ともに 8 時 30 分受付開始、9 時 30 分発表開始になりました。今回は口頭発表が割と少なく、ポスター発表が多かったのが特徴でした。昼休みの昼食は春休み



口頭発表は 2 会場



5 会場で行われたポスター発表

で、学生食堂が開いていないために、キャンパス外の大久保商店街の各種飲食店を利用して貰うことと事前に弁当の注文を取ることにしました。事前に飲食店の位置を知ってもらうために、飲食店マップを作成し、コングレスバックに入れて宣伝をしました。しかし、それほど弁当を注文した方も多くなく、飲食店の数は多いのですが、大人数を収容する店がない中、何かと昼食を取るのに苦労したのではと心配しましたが、それほど参加者から直接苦情もなかったことから、何とかかなったかなと思っております。ポスター会場は理学部講義室を5会場で行いました。これら講義室はV号館建築段階から卒研のポスター発表を行うことを見越して、両サイドの壁に鉄板20枚が据え付けられ、強力磁石でポスター用紙を貼れるようになっております。この結果、スムーズにポスター発表が出来るようにしてあり、発表者各位には満足いく発表をしていただけたのではないかと自負しております。ポスター発表の後、企画シンポジウム「若手研究者による緑色藻類研究最前線－何が何処までわかったのか？」5人の若手研究者により活発な論議がなされ、かつ5101会場が100人以上の立ち見が出るほど多数のヒトに集まって戴いて大変感謝しております。

15日の夕方には総会が開催され、シンポジウムの流れなのか、正確な人数は把握していませんが、例年になく結構な参加者がありました。6時半より懇親会が学生食堂パル2階でおこなわれました。参加者は何時もの年に比べて若干少ない175名でした、何時もの地方開催では地酒等のサプライズな企画がありますが、今回は何の工夫もない懇親会ではありましたが、それなりに楽しんで戴いたと自負しております。16日は、研究発表とは別に、午前10時から東邦大学理学部公開講座との共催で公開講演会「ちば・知られざる藻類の世界発見?多様性と絶滅、そして日本の味?」が開催された。ポスターなどの宣伝をしたわりには一般の聴講者人数が少ないのが残念でしたが、それなりに満足いく講演会ではなかったと思います。講演いただいた、鈴木雅大氏(東京大)、佐野郷美氏(千葉県船橋芝山高校)、林俊裕氏(千葉県水産総合研)にこの場を借りてお礼申し上げます。公開講演会と

じ時間帯に口頭発表も設けました。これは公開講演会の聴衆対象者を一般の人々を対象に、東邦大理学部としては更に高校生をも視野に入れての講演会でありましたので、参加会員の皆様には聴衆できない不便をお掛けしたかもしれませんが、趣旨を汲んで戴いて御了承下さい。また、16日の午後から18日にかけてワークショップ「淡水藻類の採集、観察と同定入門」が理学部生物学科顕微鏡実習室で開催され、大谷修司先生(島根大学)、辻彰洋氏(国立科学博)、新山優子氏(国立科学博)らによって16日の講義と17,18日の同定の実習が行なわれました。詳しい話は別途この号に掲載されると思いますが、東邦大学理学部生物学科の強力なAV機器と顕微鏡により多大な成果を上げたとの話を聞いております。東邦大学理学部生物学科には大変御世話になりました。

東邦大での大会開催は1996年の22回大会以来、18年ぶりの開催でしたが、数少ない会員で準備期間が短かった割にはスムーズに大会運営を進めることができたのではないかと思います。大会直前の会場設営などの準備作業には東邦大の細胞構造学研究室、植物生態学研究室の学生・大学院生の皆様に協力してもらいました。最後に学会の運営に補助金を提供して戴いた東邦大学理学部同窓会：鶴風会には大変御世話になりました。公開講演会では東邦大学習志野学事部入試広報課には多大の御世話になりました。ワークショップは新山優子(国立科学博物館)、辻彰洋(国立科学博物館)、大谷修司(島根大学)ロゴマーク作成は富塚朋子氏(千葉中央博)に協力して頂きました。また、会場のAV機器の調整には東邦大学理学部技術員の山名憲明氏には多大なご協力いただいたことに心より感謝申し上げます。最後に全国から船橋東邦大習志野キャンパスまでおいでいただいた参加者の皆様にお礼申し上げます。

第38回大会実行委員は以下の通りです：宮地和幸(東邦大学)、宮田昌彦(千葉県立中央博物館)、菊地則雄(千葉県立中央博物館分館海の博物館)、藤田隆夫(日大習志野高校)、馬場将輔(海洋生物環境研究所)鈴木雅大(東京大学)、市原健介(日本女子大学)(敬称略、順不同)。

(東邦大学)



公開講演会



学食での懇親会